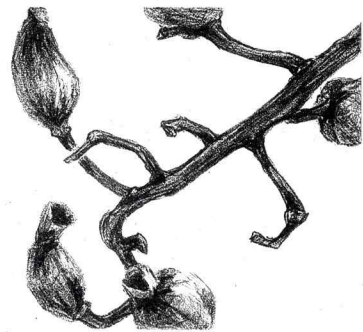


朝日歌壇 俳壇



〈ゲットウII〉 日高理恵子

◆長谷川 權選

- どこでもドア色なき風の通り抜け (福岡市) 釋 蝸硯
- 白桃は天の乳房か吸ひ尽す (市川市) 吉住 威典
- 給食のさんま腸なし頭なし (栃木県壬生町) あらゐのこし
- 食欲の秋や九十を楽に越す (西条市) 稲井 夏炉
- かにかくに夜の巷へ西鶴忌 (大阪市) 眞砂 卓三
- 灼け土にみごと干乾々 蚯蚓かな (西海市) 前田 一草
- 小説の奥へ奥へと夜長の灯 (東京都) 山口 照男
- 光浴び爆せて丹波の栗となる (奈良市) 田村 英一
- ふるさとの近きに移住秋の山 (諫早市) 後藤 耕平
- 九十の雛美しく糸瓜水 (福岡市) 松尾 康乃

【評】一席。「色なき風」は秋風。「どこでもドア」が詩になった。二席。みごとな「天の乳房」。白桃をたたえる一句。三席。食べやすいようにしてある。それでもサンマ。十句目。「九十の雛」はご自分のことか。顔も心もみずみずしく。

◆大串 章選

- 満天の星に全山虫時雨 (西東京市) 高橋 秀昭
- 初めての海の広さや秋燕 (春日部市) 池田 桐人
- 新米の出荷の我が名今年まで (袖ヶ浦市) 浜野まさる
- 蜻蛉の赤さを競ひ高みへ (柏市) 藤嶋 務
- 降り立てばすでに秋風秘境駅 (稲城市) 坂田 篤義
- 牧場を戸板舞ひ飛ぶ野分かな (浜松市) 久野 茂樹
- 過疎村の日暮れ群なす赤とんぼ (町田市) 岩見 陸一
- 解体の蔵を見届け燕去る (海南市) 楠木たけし
- 五百年続く祝祭秋暑 (ドイツ) ハルトォーク洋子
- 稲刈の声の響きて過疎の村 (相模原市) はやし 央

【評】第1句。輝く星々と鳴き立てる虫達のコロポ。天地を繋ぐ壮大な光景。第2句。日本で生まれて南方へ渡ってゆく秋燕。初めて見る海の広さを物ともせず飛んでゆく。第3句。長年続けてきた稲作を今年で止める。感慨深いことであろう。

◆高山れおな選

- 八百比丘尼歩いても歩いて銀河 (草加市) 近藤 加津
- いちじくのジャムは悪魔の手先なり (岡山市) 曾根ゆうこ
- 冒險句ひつさげて行く文化の日 (川西市) 糸賀 千代
- 濁りたる底に謎の実猿酒 (大阪市) 上西左大信
- エメラルドめくありまきの蜜満ちて (福島県会津坂下町) 五ノ井研朗
- びいどろの秋の風鈴鳴りもせいで (藤沢市) 朝広三猫子
- 長き夜の記憶で描く日本地図 (相馬市) 根岸 浩一
- ☆新米の出来を語るや小学生 (横浜市) 橋 秀文
- ぶどう煮て一日を煮て愁い煮て (オランダ) モーレンカンフふゆこ
- 『ハンチバック』読み終へし日の子規忌かな (三木市) 矢野 義信

【評】近藤さん。不老長寿は憧れであると共に恐れをも掻き立ててきた。掲句もそんな二律背反の気分を纏う。曾根さん。美味しすぎるジャムの威力?を逆説的に讀める。糸賀さん。ひっさげて行く先はもちろん句会。果たしてどんな句なのか。

◆小林 貴子選

- 升さんが好きで糸瓜を育てをり (今治市) 横田書天子
- 望の潮ニライカナイからの小瓶 (あきる野市) 松宮 明香
- 喜寿過ぎて命燃やせと彼岸花 (箕面市) 小西 鴻生
- アーモンドミルクの朝賢治の忌 (別府市) 樋園 和仁
- 蟻の擬態を競ふ垣根かな (今治市) 宮本 豊香
- 生き下手を晒す牡鹿の貌汚れ (東村山市) 高橋 喜和
- すすきは戦々鐵路に惚れてるやうだ (大和市) 澤田 睦子
- 拘りを棄てて出る知恵蚯蚓鳴く (横浜市) 高野 茂
- ☆新米の出来を語るや小学生 (横浜市) 橋 秀文
- 爽やかに為しさわやかに死が励み (伊那市) 北原喜美恵

【評】一句目。正岡子規を慕い、その象徴の糸瓜を育てるとは、感銘する。二句目は中秋の名月頃の大潮。沖繩の海の向こうの薬土から小瓶が来たとは、心が震える。敬老の日の句が多く寄せられたが、三句目のように皆さん大いに命の燃焼を。

うたをよむ 孫娘と祖父の十七音

朝日俳壇に21句が入選している千葉県成田市の小学4年生かとうゆみさんが、やはり入選常連の祖父で茨城県日立市に住む加藤宙さんの共著「六歳の俳句 孫娘とじっちゃん十七音日記」(光文社)を出した。

ゆみさんが俳句に出会ったのは六歳のとき。宙さんの2013年一朝日俳壇賞「受賞句(微笑みに虹を残して子の眠る)が、生まれたばかりのゆみさんのことを詠んだ作品だと知った。一緒に俳句を作りたーい」

初入選は21年1月24日の紙面。小学1年生だった。<こくどうにぞうきんみたいなたぬきかな>。高山れおな選者は「交通事故死した狸。比喩が率直的確。作者は七歳」と選評を付けた。この年の8月8日の紙面では<ゆっくりと見たり聞いたりカタツムリ>が高山選と長谷川權選で入選。同じ日の紙面には、宙さんの<山ひとつ海に流して梅雨明け>が長谷川選で載った。

その後、次のような句も紙面に掲載された。<九人に一人うてるお正月> <委員長にえらばれましたはつがつお> <手を合わすことがたくさん夏の雲> 自作で好きな句は<かなしみにふけばとばないしゃぼん玉> <ウクライナに行かねばならぬサントさん>。

「六歳の俳句」に、ゆみさんの言葉がある。「わたしはほかの人とちがって、ゆっくり歩いてないと見えないことがある。ゆっくり歩いていると発見できることがある。発見することが好きなわたしだから、俳句をつくることはわたしに合っていると思っています」(俳壇担当 西秀治)

記者サロン「歌人・科学者 永田和宏さん×AI短歌」永田和宏さんを迎え、AIを使いながら歌や創作について語る催しを28日(土)に朝日新聞東京本社で開きます。会場では連歌にも挑戦。定員は120人(抽選)。11月2日から12月25日までオンラインでも視聴可能。申し込みは募集ページ(<http://t.asahi.com/wn7z>)、またはQRコードから。



☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。